



立入が丘小学校だより



No. 3

子どもと読書との関わり

5月の学校だよりでスマホと子どもの不読率（本を読まない子どもの割合）の関係性について書きました。今回は、読書が子どもに及ぼす影響について考えたいと思います。

国立青少年教育振興機構の調査（令和3年度と少し前のデータですが…）によると、子どもの頃の読書量が多い人は、そうでない人よりも意識・非認知能力が高い傾向にあるそうです。「意識」とは、自己の行動や感情を認識し調整する力を差します。「非認知能力」とは、物事に対する考え方、取り組む姿勢、行動など、日常生活・社会活動において重要な影響を及ぼす能力を差します。これらは、本校の教育目標である「自ら学ぼうとする意欲的な子ども」「ねばり強く、たくましく、しなやかに、個性豊かな子ども」「人・地域・自然を愛する心豊かな子ども」の育成に大きく影響する事柄だと思えます。読書の影響が、学校生活の様々な場面で児童個々の姿として出ているのかもしれませんが、また、この意識・非認知能力の高さは、スマホやタブレットで読書をしている人よりも本（紙媒体）で読書をしている人の方が高い傾向があることも報告されています。

また、ベネッセコーポレーションが昨年度公表した小学生から高校生の10年間（2015～2024）の追跡調査データによると、いずれの学校段階においても読書時間は減少傾向にあります。反対にスマホの利用時間は小学4～6年生で平均22.4分、中学生になると51.9分も長くなり、大幅な増加傾向にあります。他の調査結果として、小中学生において読書時間が長いほど語彙力が高い傾向が見られ、読書の大切さが伺えます。他に、保護者が読書の大切さを伝えるほど子どもは読書をするという傾向が見られ、大人の働きかけの大切さを感じます。

学校図書館では、図書館の活性化のため、学校司書や『本よみさん太郎』さんと連携しながら取組を進めていきます。読書量が増えるように、学級単位で読書冊数を集計して競う「読書チャレンジ」や、開けてみてのお楽しみの「本の福袋」、読むたびにスタンプが増える「スタンプラリー」等、委員会活動での企画も構想中です。子どもが本に触れる機会が少しでも増えるよう、学校図書館を訪れる児童が増えるようにと願っています。

